



星降る夜の日光

オリジナル小説

著者 鳴虫山書房(なきむしやましょぼう)

日光山内【円融三諦】	P1
歌ヶ浜【東から西へ、死んでは生まれる】	P5
戦場ヶ原【神話と現代の親和性について】	P8
足尾【ほしとおねがい】	P11
霧降高原【ほしのおしろ】	P14

日光山内
円融三諦

日光山内に訪れた仲良し三人組。彼女たちは働き盛り、遊び盛り。歳を重ねる事に増える悩みは尽きません。お星様としては三人のお願い全部聞いてあげたいところ。

でも、彼女たちの願いは交差して思わぬ方向に！

全員を幸せにするって難しいのね

ゝいずみの願いゝ

「この曲が作られたのが歌ヶ浜！いろは坂登った先だから明日行こうね」

みよりの好きなミュージシャンが日光で曲を作ったからという理由で訪れた女三人旅行。彼女はスマホから曲を流して熱く語る。

「由奈が行きたいなら付き合うよ。ね、いずみ」

仕事人間で真面目なひなたはこの日のために無理やり有給を取って私たちに付き合ってくれている。

「うん。皆が行きたい所回ろう。今日は山内を。明日はそっちで」

私はこの三人がずっと一緒ならいいなと思ってずっと思ってる。

「あのね、日光の社寺の位置関係を点にして線で結ぶとオリオン座になるんだって。星空を大地に写し取ってここを祈りの地にしたんじゃないかって説があるの。だから願い事を聞いてくれるかもしれない。三人でお願いしよう」

宿の窓から見上げる夜空。冬の澄んだ空気が星の光を真っ直ぐ私たちに届けてくれる。

「仕事がうまくいきますように」

「もっと三人で旅行に行けますように」

「金金金！」

三人のお願いが叶いますように！

くひなたの願い

みよりの願いは一生叶わなくていい。

みよりが金持ちになったら必死に働いてる私の意味がなくなる。いずみの願いが叶ってほしい。そうしたらライブとか遠征に行きたい由奈はいずみが言う三人の旅行には行けず、私を頼ってくれる。私をもっと稼いでみよりと一緒にいられるようにしなきゃ。嫌な仕事も、耐えなきゃ。

くみよりの願い

私はひなたの家に居候してはばば養ってもらってる。でも、ひなたはいつも疲れて帰ってくる。帰ってきたと思ったらまた仕事に行く。正直、耐えられない。早く仕事探さなきゃ。ひなたに止められても、泣かれても。いずみに助けてなんて言えないし。いい就職先が見つかりますように。

数ヶ月後

「聞いて！あそこ辞めたら大手のホワイト受かった！稼ぎが倍になる！」

「旅行券三人分当たった！また三人で遊べるね！」

星がひなたといずみの願いを聞き入れたかどうかは定かじやないけど、二人の願い事は見事叶った。そして、私も。

「はい、由奈のお小遣い」

「ありがとう……」

こんなだからひなたは変わらず私に仕事をさせないし、手渡す額と私の罪悪感が増えるばかり。また、三人で日光の星をお願いに行けるといいな。次は違うお願いするんだ。

ひ
な
た
と
縁
が
切
れ
ま
す
よ
う
に

歌ヶ浜

東から西へ、死んでは生まれる

昔の人は太陽や星が毎日生死を繰り返していたと思っていたんだって。人間もそうじゃない？いいことがあって、嫌なことがあって。死ぬ気でいつも生きていくんでしょう。どうか負けないで。この主人公は駆け出しの作曲家と歌手の二人が勝利の星を掴むお話。

夕日が頬を染めながら西へ、向こうの浜のさらに向こうへ帰っていく。ピンク色の夕焼けは湖面にムクゲの花を咲かせる。この色の空は翌日に重い雲を連れてくる。明日は雨だろう。冬の冷えて澄んだ空気が観光客を宿に帰らせる。そんな中、浜を見つめる人影がふたつ。

「ダメだ、なんも浮かばない」

「頑張れ！いい曲作って歌わせてくれ」

ギターと頭を抱えた青年と学生服の少年。立木観音を背に夕日を見送っている。

「書けないから応援して……勝道上人応援した天女の神話みたいにそこで踊って」

「やだよ」

手にした五線譜の紙束には音符は書かれておらず、裏に「再生する星」「天女の応援歌」「祝杯の宴」とメモだけが残されている。

「星をモチーフにしてほしいって言われてるんだけど……そうだ。湖面に映る星空をドレスにした天女の歌ってどうかな」

いつの間にか日は暮れていた。空が湖にも星屑を落としている。青年は湖から目を離すことなく続ける。

「空と湖の星を一度に見たら、いつもの二倍頑張れそうな気がしない？」

「ロマンチックな曲書けそうじゃん。頑張れ頑張れ」

少年が笑い、見様見真似の不格好なバレエを踊る。膝の上まで捲られたストラックスから覗く両脚には大きな傷がある。

一度取れてしまったかのような、キリトリ線のような。それが星空をバックに回る。

「いい脚だ」

「挫折した証拠なの？」

「再生の道を選んでくれたから」

「それはそっちも。前じゃ考えられないね。思い詰めてたくせにこっちにきて作曲家稼業に落ち着くとは。まあ、そのおかげで曲が書けるのか」

「ホント、もう音楽なんて辞めようと思ってたのになあ」

この日作った曲は後に動画配信サイトで500万回以上の再生数を誇ることとなった。

戦場ヶ原

神話と現代の親和性について

日光には不思議なお話がたくさんあります。誰がなんのために考えたのか、はたまた本当に起こったことか。真相は天の星のみぞ知る。探求や追求は楽しいもの。その調子でもっと日光を知って好きになってくださいね。でも、あまり考えすぎると頭に蛇が巻き付きますよ

昔々、群馬の神様と日光の神様はいつも争っていた。群馬の赤城山は岩だらけで水がなかった為、日光の豊かな中禅寺湖の水を羨んでいた。群馬の神様は日光の神様と取っ組み合いながら、水を掬って赤城山へ投げた。

水を取り返そうと日光の神様は白蛇の大群を赤城山へ向かわせた。しかしそれを迎え撃つは赤城のムカデの大群。白蛇軍はその猛攻に為す術なく、侵入を許してしまった。

味方を探した日光の神様は白鹿の姿で奥州の厚樫山の辺りに住まう猿麻呂という若者に加勢を頼む。もし赤城の軍勢を撃退したのなら、男体山を狩場として与えるという約束の元、猿麻呂は協力することとなる。

翌朝、日光の白蛇軍と猿麻呂は地響きとともに攻め寄るムカデの大群と対峙する。すさまじい戦いに息をのむ猿麻呂であったが、日光の神様との約束を思い出し、大ムカデに向かって弓を放った。それは見事大ムカデの左目にあたり、弱った大ムカデは赤城の山中へ退却する。勝利の星を掴んだ日光の神様と猿麻呂は現在の歌ヶ浜で宴を行い、お互いを讃えた。

こうして日光の平和は守られたのである。この時の戦場がここ、戦場ヶ原。

「怪しい!」

神話を読み漁り、実際に戦場ヶ原に来てみた。そして、この物語は絶対何かを隠していると確信した。

「取り合った場所は本当に中禅寺湖?争ったのは神様と言っているけど本当は……」

本のページを捲る音がホテルの部屋に響く。ノートパソコンのキーボードが忙しく喋る。カタカタカタ、ターン!

エンターキーが叫ぶ。

「やっぱり……ムカデは鍛冶屋と金属産業を守る神使の象徴、そして金属が豊富な土地に生える鉱山植物、ヘビノネゴザ……！ヘビ！これは足尾の鉄を巡った領土争い？いや、もしかしたら……銅？！」

窓に駆け寄り、戦場ヶ原へ続く星空を見上げる。冷たく澄んだ空気が頬を撫でた。広い夜空には無数の星が輝いている。今も昔も変わらない雄大な景色が両手を広げていた。

「……ま、いっか。そっとしておくのもロマンかな」

見上げた先の北斗七星は蛇のようにもムカデのようにも見えた。

足尾
ほしとおねがい

私は足尾の星。多くの人の願いが交差した土地で人々の願いを聞きいれて、発展と繁栄を見届けた。笑顔も苦悶の表情も見てきたけれど、それは時代の移り変わりと共に静かに消えていく。今の足尾の星空はあなたの目にどう映る？

私は足尾に光を届ける星。人々の願いを聞き入れるのが私の仕事。

「ああ、お星様。どうか娘に新しい着物を買うお金を」

ええ、いいでしょう。あなたを豊かにしてさしあげましょう。この山をお掘りなさい。

「お星様のおかげだ！ここは宝の山だ！銅が沢山採れるぞ」

うれしいわ。人々が喜んでいる。ここに住む者も沢山増えたわ。

「もっと掘れ、もっと利益を」

おや、私の方を見てはくれないけれど人々は祈っている。更なる繁栄を、豊かさを。いいでしょう。励みなさい。ここを工業の発展の地としましょう。

「ゲホッ、おかしいな、こんなに、長い坂だったか」

どうしたのかしら。このところ私よりも強く光るものが地上にあって、人々の表情が見えないの。

「この地に緑を取り戻すんだ」

人々はもう私を見上げてはくれない。俯いて、木の無い山に土を運んでいる。それでも私は祈りを受け取り、光を届ける星。いつでも見守っているわ。

「どうか、どうかこの地を助けてください」

ええ、またあの頃のように緑が沢山ある足尾にしましょうね。

あれからどれくらい経ったのかしら。人間は短命だから、何代もこの人の願いを聞いてきた。だけど、もうここには私に祈りに来る者はないのかしら。

あんなに眩しかった光も、空まで届く煙もなくなった。お家も随分減った。だけど、見渡せば緑でいっぱい。昔のようには動物も花も戻ってきたのに……。

……あら、あなた足尾に来たの？ここはどう？いろいろあったけれど、どの人間もこの地のために頑張っていたのよ。星も見られなくなるくらいに。

だから、あなたには見上げてほしい。煙突の上の、鉄橋の上の私たちを。あのね、これは私のお願い。星からのお願い聞ってくれる？

この地と人の努力の美しさを他の人に伝えてほしいの。おねがいね。

霧降高原
ほしのおしろ

あれはあなたたち人からしたらすこし昔のこと。日本が大きく変わろうとしていた時代。ここからあなたたちは文明開化を得て光を手にして私たちを見上げることも少なくなってしまうのね。当時の人々は勇ましく、慌ただしく駆けていました。そう、彼らは北へ、北へ……星をめざして

「あの音はなにかしら」

星の神様は六方沢の谷底から聞こえる音を不思議に思い、地上を覗きました。

「なにも見えないわ」

重く厚い雲のカーテンを掻き分け、身を乗り出してよく見ようとします。星の神様は雲の間から顔を出すと、谷底にたくさんの方の行進を見つけました。不思議な音は人々の足音だったのです。

「まあ、こんなところに人がたくさん！」

珍しい光景に星の神様は手を叩いて喜びます。そのパチパチとした音が谷底へ落ち、重ねられた焚き木に重なると炎が生まれました。すると、谷底からは人間の喜ぶ声が！それは星の神様の耳に届きました。

「よかった。晴れてくれた。火も着いた。今日はここで野宿ができる」

人間たちは暫くすると、谷底に多くの光を生み出しました。

「すごい！地上にも星はあるのね」

ゆらゆらと灯る燈に星の神様は喜びます。美しさに目を細めて何度も瞬きをしました。その様子に地上の人間たちも気が付いたのか、上を見上げています。

「綺麗な星空だ」

「あとどれくらいこの星を見られるだろう」

人間たちは手に持った刀の血を拭っていました。綺麗になった鋼が焚き火の灯りを反射させて空へその輝きを届けま

す。

「あの人間たちは戦っていたのかしら」

星の光を強めて人間たちを明るく照らすと、彼らが軍服を着ているということがわかりました。怪我をしている人も沢山います。

「可哀想に……」

星の神様は嘆きましたが、泣いてしまったのは涙の雨が降ってしまいます。そうすると谷底の炎は消え、川の水が増え、てしまうので神様は泣くのを我慢しました。

次の日の夜も同じように星の神様は谷底を覗きましたが、そこに星はひとつも落ちていませんでした。

「どこへ行くのかしら」

あの人間……いえ、旧幕府軍の兵士たちは北へ、海を越えてさらに北へ。星の形をしたお城を目指すのです。